

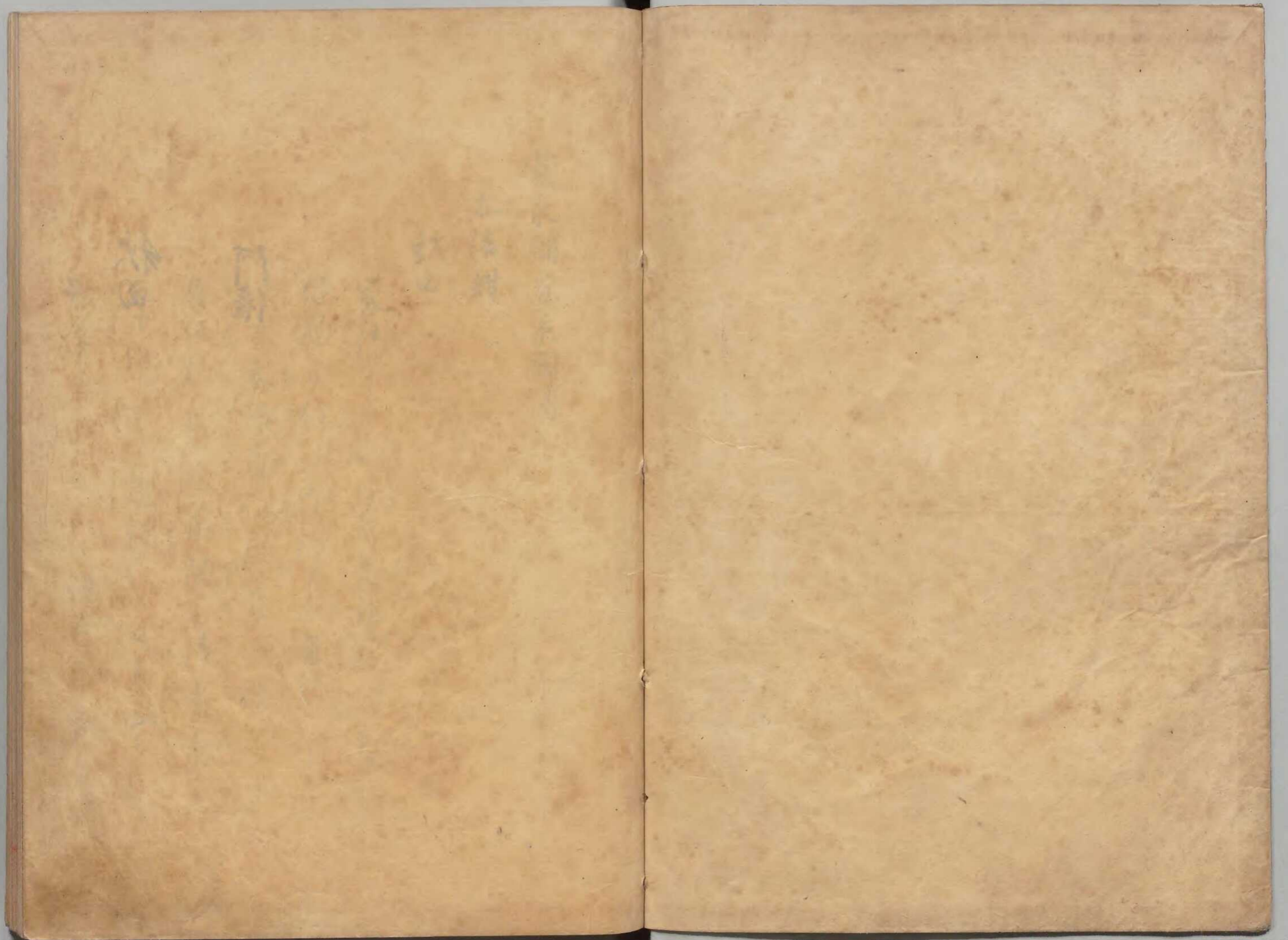
寛永諸家譜

安倍氏
二卷之内

148

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186(148)		
函號	特	76	1





秋田

阿倍

寛永諸家系圖傳

安倍姓

秋田

淺草文庫

家傳いへんは、先祖せんぞ按列あへり安倍野あへの

伊駒いこま又伊いううらら奥列おくり

伊いと安倍あへ責任せきにんははううのの孫まごなり

責任せきにんはは後冷泉院ごれいぜんいんのの清字せいじ永承えいじょう

年中なちゆうはは送傳そうでんととくくををくく

初はつ命のみことははくく珠たませせくくのの

初命はつのみことははくく珠たませせくくのの

餘族奥列
後流あり
麻季は

● 鹿季

秋田太郎 城似 生岡お好

鹿季より愛季より

秋田太郎と稱し

寛永年中より卒古漢よりい

て秋田乃漢と云

同三十年六月十六日

法名成雲

成季

生岡回前

文安二の四月十日又新
法名持伴

惟季

生岡回前

寛正三年八月五日
遊あそと法衣
安長

昭季あき

生岡同前
延徳二年八月廿八日
遊あそと法衣
祥山

宗季むね

生岡同前
永正十一年七月廿七日
遊あそと法衣あそ
海うみ

宣季のり

生岡同前
天文二年九月七日
遊あそと法衣あそ
月つき

宣季のり

生岡同前

天文十三年九月三日に逝と 法名石庵

友孝

生同同あ

天文十三三年九月廿六日に逝と十六歳
法名旭山

愛孝

生同同あ

宮内友孝金歩るり友孝没して
乃り家督とす

天正十三年九月一日に逝と法名石庵

實孝

東右衛門 生同同あ

天文十年九月十日に逝と位下位に

叙 枯田成久と稱す

東照公御現しつる

後季

東左衛門 生同歳

元和元年四月廿六日位下り

叙一侍従ついで

同五年四月二十日内守ついで

重隆

大務ついで 後集人ついで 生同常陸ついで

長十七ついで 七歳ついで

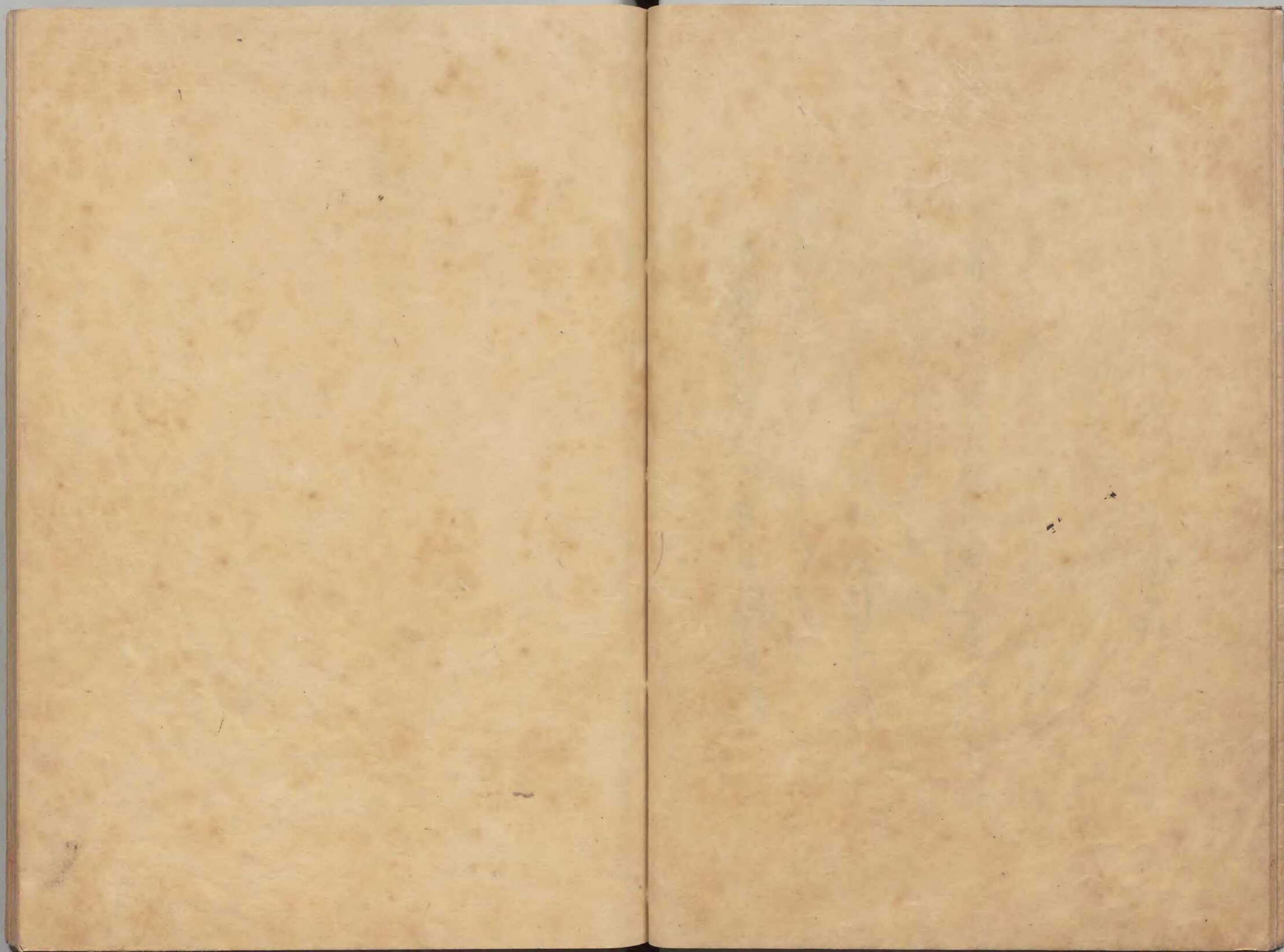
将軍家ついで 少輔ついで

元和九年七月位下り叙一

集人ついで

寛永二年八月書院ついで 書ついで

家の致ついで 梅ついで 扇ついで の内ついで 持ついで 子ついで



集

道喜

阿倍

冬列の住人

大茂

清康君

廣忠卿又曰くまの

里々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

大権現法知少ハヒ大慈恩縁ありて

法事トナリとウの法ありアなりヨなりニ

ノありニありノありノありノありノあり

救済れ我功トシありシありシありシあり道号玉苑

法名玄海

宣次

宣卿

宣卿

清康君は事あり時兄の大慈は

廣忠卿よりありまのそく伊勢國

不あり不あり不あり不あり不あり不あり不あり不あり不あり

ありて冬河を以て酒代申あり

ゆり針社佛寺ありすありすありすありすあり

廣忠卿と二あり二あり二あり二あり二あり二あり二あり二あり二あり

まありまありまありまありまありまありまありまありまあり

らありらありらありらありらありらありらありらありらあり

感獲ありけりありけりありけりありけりありけりありけりありけりありけりあり

わ〜となり 遷^{うつ}後^ごと 叩^{たた}く 少^すう^う〜
定次^{じやうじ} 勤^{きん}勤^{きん}乃^の 不^ふい^いと 叩^{たた}て 勿^な涉^{しや}
一^い張^{ぢやう}又^{また} 救^{きう}代^{だい}乃^の 涉^{しや}家^け人^{にん} 等^{らう}〜
らひ^らあ^あ〜 せ^せ〜 け^け〜
ほ^ほわ^わ〜 中^{ちゆう}々^々の^の 一^い〜 唐^{たう}忠^{ちゆう} 瑯^{らう} 曼^{まん}
誇^{こほ}〜 一^い 句^くり^り〜 世^せに^に 事^じと 地^ち〜
定^{じやう}次^じ げ^げ〜 び^び乃^の 勤^{きん}勞^{らう} 并^{へい} 又^{また} 忠^{ちゆう} 家^け人^{にん} 乃^の
忠^{ちゆう} 不^ふ 忠^{ちゆう} と 書^{しよ} 志^し 一^い〜 一^い〜 是^し 誠^{じやう}
一^い〜 一^い〜 又^{また} 一^い〜 一^い〜 乃^の 一^い〜 一^い〜

次重

定次^{じやうじ} 戦^{せん} 場^{ばう} 一^い〜 一^い〜 一^い〜
一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜
一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜
一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜

忠改

天^{てん}文^{ぶん} 十^{じゆ}六^{ろく}年^{ねん} 冬^{ふゆ} 列^{れつ} 三^{さん} 将^{しやう} 一^い〜 一^い〜
合^{がっ} 戦^{せん} 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜
一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜

一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜 一^い〜

實は久保長政の次郎忠次がなす
忠次は久保長政の次郎忠次
次男新八郎忠俊が男あり忠俊は道
常源と号し忠次一代の武切
か海とくは是と略と次重討
死の候定次男子なきゆへに阿倍
大藏と久保新八郎忠俊とを
て忠政と定次がしとて家督
とつて忠政いへりなりと武蔵と

この中あもときと精兵の射と
様で〜〜〜教名とあけり
天文十四年冬列安祥信濃より
合戦は忠政十六歳ありて
ていつと〜〜〜尾列乃信大相集と
射は〜〜久保長政の基首とえ
〜〜〜時女吉原の射〜〜死
と尾列の織田源正忠雨録あり
同十四年頃の合戦の時忠政一歳と

同我場（同）一（一）尾列の先（先）け
此武者と射（射）らる（らる）と

同十六年冬列梅が坪（坪）少く此と少

わい一忠政難（難）而（而）又す（又）尾列の

大物と一（一）比古卒（卒）あま（あま）と射（射）らる（らる）と

又より教（教）え（え）ゆり事（事）あ（あ）と（と）す（す）て

列（列）あり（あり）り（り）く（く）後日（後日）一（一）其矢（其矢）と（と）さ（さ）る（る）

同十七年嶋原のき口（き口）の時忠政尾列の

大物荒川新八郎（新八郎）が七年教人（教人）と射
ころ（ころ）と

同年冬列西野（西野）一（一）と（と）し（し）く（く）尾列の

矢と（矢）あ（あ）方（方）より馬足（馬足）狩（狩）て（て）い（い）と（と）し（し）

た（た）ふ（ふ）事（事）あ（あ）ら（ら）なり（なり）忠政（忠政）あ（あ）と（と）松浦

八郎（八郎）又（又）郎（郎）澄色（澄色）た（た）あ（あ）み（み）郎（郎）と（と）同矢（同矢）と

と（と）射（射）り（り）と（と）射（射）ら（ら）る（る）と（と）或（或）ハ（ハ）死（死）一

或ハ（或ハ）死（死）と（と）射（射）ら（ら）る（る）と（と）射（射）ら（ら）る（る）と（と）射（射）ら（ら）る（る）と（と）射（射）ら（ら）る（る）と
同年冬列山中城（山中城）せめ（せめ）の（の）と（と）比（比）久（久）保

上節右忠教陣少くも一はつきり
祇茂の少くも一はつきりありし
所と忠政是ともう少くも教陣人との
たぐいて其二人とくる所は一はつきり
所はつきりあはせははわぬ教陣と
破れり
同十八年安祥合戦其外尾列はつきり
梅ヶ坪屋原の原をくも一はつきり教
はつきり一はつきり一はつきり忠政志をく

武勇とくも一はつきり
弘治元年尾列蟹江に城の大小も
て忠政尾列はつきり城をわたり守り
一はつきり義とくも一はつきり板浦也はつきり
久保と節右忠の目甚だ節同次はつきり
為同而一はつきりあり
同二年酒井左忠の耐忠次冬列はつきり
尾列のさき福若のよりかしてあり
河久保と節右忠の目次はつきり酒名也八太はつきり

松浦八郎五郎寛助を吏大原作左衛門
とひ忠政加勢としてかこむ

むく時女尾列の軍大野荒川新八郎

柴田修理亮勝家来々々これとせし

は時渡急敵れ先づけ早川友太を射

にすすしとくく敵も戸とくはんと

とけみ八郎を弟の赤戸と開てしけ

お放ちが首ととんとすろよ柴田

此来り強しとくく八郎を弟とつぎ

かきうおしと忠政うけお柴田と射

くきうすつく治右衛門ハ強よて馬

の三郎とけく柴田とくく

あわさくくあり右政二夜うけおつぎ

寛等ついでくおくはあま放ちが尸

とくく城めしつ柴田荒川日來威勢

をのくくひ不和なりぬりたごいり

そ初をたせんとしてぬけげしけ

つまず申かみのとくく松浦渡急忠政

三人矢ヤさふとつうして射射けし一一度
わろひの死死しあろひのますしとつうして
まのつりしはあろひのますしとつうして
いさししくあろひ

永祿元年石川石川の戦戦り冬列冬列野屋
の先先うけれもの後後忠政忠政教教とこの首首
石川日向石川日向ち家人家人山崎山崎忠政忠政使使討討れ
大権現大権現沙流沙流ありく一番一番のち名名ありと
のちふ新屋新屋水野水野下野下野ちが西西流流

凡凡 後忠卿後忠卿乃沙村乃沙村

大権現大権現沙流沙流ありく一番一番のち名名ありと
鴨原鴨原と野野西野西野教教箇箇度度の合合戦戦り
忠政忠政乃乃忠忠卿卿乃乃沙沙村村
軍忠軍忠ととげちせしあろひ

同三年同三年新屋新屋十八十八所所れよりあひ忠政
ととみちく新屋新屋合合戦戦ととつ
同年

大権現乃作として公平とついで
共糧と大高乃城より兵隊を遣ふ
義元後府より兵隊を遣ふ
かたしては度義元討死と是より
大権現大高と川より兵隊を遣ふ
是より思孫乃城より兵隊を遣ふ
同六年七月に召参りかく一向宗
蜂起のとき大久保忠興と一隊と
あつたかゝりお田のか丸とまのりあつた

忠政にて是より扇一具と又凶流と
いふふたつといふ教兵と射く事づく
その中より海軍の事務に服し射く事花
甚ふ節はあ股にあつた川田彦十郎
八片股と射れ甚ふ八太史を服さう
及糧と送りて服りてきつてはく
軍ありてはよみそ矢と送付見物更
ハ見これ板より背よりさう板部
又六ヶ糧の事さぐみよりすらひま

背^{そむ}より矢^やを射^やりて死^しす
矢^やを射^やりて死^しす

同七年吉良の合我々忠政城^よを
いりて敵^{てき}の猛^{まう}射^やりて矢^や

とくふ又浮橋^{うきはし}め^めて敵^{てき}れお^おら^らく
射^やりて^て深津^{ふかづ}八九郎^{やう}其首^{かぶ}を

とくふ又浮橋^{うきはし}め^めて敵^{てき}れお^おら^らく
射^やりて^て深津^{ふかづ}八九郎^{やう}其首^{かぶ}を
射^やりて^て深津^{ふかづ}八九郎^{やう}其首^{かぶ}を
射^やりて^て深津^{ふかづ}八九郎^{やう}其首^{かぶ}を

同八年酒井の監上野^{いづみ}と野^のとひく^{ひく}深板^{ふかいた}
と^とお^おこ^こせ^せら^らめ^めら^ら

大権現^{おほごんげん}矢^やを射^やりてせめ^{せめ}せ^せた^たふ
射^やりて^て忠政^{ちゆうせい}大久保^{おほくほ}を^をた^たす^すお^おけ^けい

て軍^{ぐん}事^じを^をい^いと^とひ^ひす^すで^でめ^めて^て此^{こゝ}に^に

は^はの^の時^{とき}敵^{てき}れ^れ先^まづ^づも^もと^と射^やり^りと^と勢^{せい}列^り
の^の九^く鬼^きが^が許^{もと}より^りか^か珠^{たま}と

大権現^{おほごんげん}矢^やを射^やりてせめ^{せめ}せ^せた^たふ
射^やりて^て忠政^{ちゆうせい}大久保^{おほくほ}を^をた^たす^すお^おけ^けい
射^やりて^て忠政^{ちゆうせい}大久保^{おほくほ}を^をた^たす^すお^おけ^けい
射^やりて^て忠政^{ちゆうせい}大久保^{おほくほ}を^をた^たす^すお^おけ^けい

為よしあさく海陸可ともいひく矢と
しりし矢又あさり死しすづ
この教書はわたり猪村と均あ
元龜元年江列姉川合戦又忠政
兵士二騎と射行し
大槓現と述と沙流あり
同三年を列三方原退陣の時
みく忠政甲列乃兵三騎と射あり
一族也人と同族なり

天正三年長瀬合戦の時海井乃射
忠次七率といひきくて葛原山
しりし忠政は又も作と承て
忠次と相とく明らまはるる
要害の地とるがゆあり
同日年を列乾乃合戦の時日比
忠政りしと相とるて是とあせ
け時勝頼葛原常陸又乾の邑と
りし後列を列後列の目と

教養の戦場せんじやうの志し志政大久保
七郎しちろうの志世しよもあはる軍ぐん伊越いぜつ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ

大権現の命おほいけんげんのみこととうもさるる志世しよ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ

志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ

志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ
志し政せい大だい久きゆう保ほ

名子よとくれぬ道も清室也よわが
つらきしつらき辞退せしめつら
又よきとひひつらつらハ大久保
セ席をあらせども修列しありて
いまよきとすそと勝川右左衛門
れしつらとつらつらつらとつら
ひしたくしれしつらつらつら
いつしの方の先陣つらつらつら
あつらつらつらつらつらつら

城と堅固よ守護とつらつら忠政二
つらつらつらつらつらつら
いよふんとつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつら
大権現大つらつらつらつら
忠政とつらつらつらつらつら
のらつらつらつらつらつら
お換つらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつら

大権現開東の方へ沙馬と名道系勝
と証しあるんとも小山と清
陣とすへら

名徳院殿を宇劫ままたしあともり
時にお換守とお具して右政修列
小室の深澤中を軍切と借し
いへども野陣のり傷重と病お
して治し帰る一は道に真田
いあもしうん

同七年

名徳院殿右政が壯年の比より軍法
あまうり事とさしり

大権現よりこせ給い沙あへり
これうのその事ともと名助あり
時よ七年三歳

同十二年忠政病歿年十八
常覺

忠道

室御忠卿

佛引りしとひくうりあきと
して残ぬと

重真

若太史 室御重真

忠政浪人の時重真志りく満生花

氏郷は志くくく園引りあり
九郎の侍り有りしと一対大英と
一擧の擧り射さく養あり時
天正十九年ありうり氏郷の
郎佐等数百人法黨とくみ舎
とくらのく重真氏郷の下知とう
あきく枝等が政と志くい法
と射りて利とゆ

長十一年三月重真依見と

とて

大権現一陽一とて

え和え多四月大坂陣前 修と

かありて是將士千人とあり

同二年四月より五百名れ 兼他と修

大権現苑地の段

名徳院殿一とあり

同八年十二月 露およありる所の区

勝也十人とありありて馬十

騎是將二十人とあり

同九年四月

名徳院殿の命一とあり

將軍あり一とあり

寛永元年九月 修地五百石とあり

あり

同八年二月 ありよありと六十七歳

法名目切

重信

源氏長者 重信

長十七子

名瀬院殿

元和九年

名瀬院殿の

將軍

寛永六年

日七年 奉地又百石とたなふ
日八年 二月 重信殿にて 授七月
家督とけくづきの よきと
与力同んともみおのしと支
配と
同十年 又百石の地とくつとたなふ

重朝

八と出

ゆゑに又新浦馬場沙將の死を
法士一若志と禁したまひの巻行
杖を指しつりし所を今もみせ
何れも中より一西之一人り
喜山伯耆守 今我傳くといふ
結麻多勢子をまじはれ討つるを
べしとありこのゆゑに西之獨り
矢も帯せり

同十六日十二月朔 平岩五兵衛

親を別那古屋めとひく病氣は
台座院殿さうめされ正之を 二夜と

して那古屋りつとさふ可しこ
しつり親を病跡を見せり
月ありし江戸よりそとを同
ひふ又修しつりて後河りてあり

親を病証ありし女醫師おの事と

大権現りしとあり 同十七日江戸

子海新と

日十七日使番とるり討め二千九歳
日十八年沙目付とて城列
伊人の概みおしり

日十九日沙目付とて肥後國へ来

一きり位とありありすくくか

とんとてしきまおち故私おるに

より沙進發とて西入海の記

修書より列と十一月十九日

台座院殿伊人より沙進とて

河内へ津馬とかりし時一正之代

命と取りとけり又おとしき危殆

心中為と経歴とて法軍勢乃

陣場と見はくろいむり法軍勢

の中とつづいそ忠直あり又は

密謀れ淡とありやと道路れちま

細細とて晝夜とより法

人様来れ風況とより海

と虚実とつづきとて河内平野に

馳系 上野より一巻一巻に成る由新交
又新下そのら志ばく 上使
也して心中為めしるる同世七
正之平野 又糸作と本多依渡さ
正信正之とちうぢもく 小八回為る
天満より傳はれ新家とれる
つけ城と採べき 亦やあるとて何れ
見及所の地地れ 新築と流るる
別沖前へ右ぐく 大繪圖と採る 正之

ワカシ安とふ

台酒院敷の修り 我きのふ

大樽現とおらり 亦世がふ
亦うたがもす 亦沙感り 亦
多町のとさより 亦子の法年
重氣と志のきく 城をせむ
多乃人びる 亦か
新つけ城とさる 亦
のおさん 亦

あつちの糸伏見まで西へ向うを
ありと東へ暖氣としりて徳軍
勢に備へ大坂の城を清よりつめ
ありては子細みりて明の軍
射馬の重信と水中橋へつり
こりて浅き川へつり地形とを
志ありては人ごに任つけらるる
かりいうまゝ重信とありし西へ
しりて振神とさつりて志あり

しりては射馬身業同し
とれ事なりとありし西へ
任は
あつちの糸伏見まで西へ向うを
ありと東へ暖氣としりて徳軍
勢に備へ大坂の城を清よりつめ
ありては子細みりて明の軍
射馬の重信と水中橋へつり
こりて浅き川へつり地形とを
志ありては人ごに任つけらるる
かりいうまゝ重信とありし西へ
しりて振神とさつりて志あり

事おそれる事ありあらず御がりくわ
重信しげのぶとおもひのひくまよりまき
しとあわくそととといひ
ゆりしを海をゆり 信ありしは
佐渡守をゆり 信ありしは
斗たうゆりしを海をゆり

大権規おほごんぎりしとすんんなり
田サの子し止とりりり中ちゆう治ち一いつ極ごく也
じと馬うま言こと音ね功こう陣じん揚やうよよあり

て繪え馬ばとと一いつ何なにくら日ひ八はち松しょう平へい武ぶ彦ひこ也
村むら澄さやが後のちあありりて繪え馬ばとと記しせり
ゆりしとゆりしとゆりしとゆりしと
いりりて武彦ぶひこも小こ屋や場ば乃の
薬山やくざん一いつ坊ぼうがりて三さん浦うら戸と肥ひ後ご也
新家しんけより先まづけりて海うみをゆり
ゆり款くわんといひし我われくそとといひ
野田の上のう福ふく治ちりりりり入い松しょう平へい在ざい緒じょ
兵士へいし戸と川がわよりりりりりり天てん海かい

しをせしふ西之先とのぞみ見
ておしららぬ軍務すくわ
あしく歎れしりあしん事と
ありい利澄とすくわか
うかづんといども利澄とす
検使城お果る津下知あき事と
いとわくく又けくんやせ
て人救とかげ西之かとい
は士率ともあ歎れあみえ

後悔すとも甲斐あつち
はとさめもわいごめん
けいどもお果しわり回させ
西之いしり上福清より戸川
しあつし検使等左巻の情
先かもの共ともりつ海老江
川とも志あんないうりけつと西之
しいよくおべしと制しけ
ともまへしとて戸川折言

あ〜〜果は一足あ〜〜も上福治と
さ〜〜子こいふ然やま 上使と
〜成徳集人正来り〜戸川が
と福治〜〜〜〜〜事感と
黒石の者〜〜〜〜〜に後地はあ
雖而凡地〜〜〜〜〜但馬さか軍
卒〜〜が勢〜〜〜〜〜の如
れ名〜〜〜〜〜戸川五郎の思ひ
かせり 懐ぬ及〜〜〜〜〜天海大教共
か

智深つ〜〜〜〜〜てお向うまき事と
見きこゝあ石川主殿が忠徳がせめ致
〜〜〜〜〜又主殿が仙波
〜〜〜〜〜お我あ〜〜〜忠徳
〜〜〜〜〜御を見んや〜〜〜
のり向井の監〜〜〜〜〜法軍
〜〜〜〜〜平野の御り

台徳院殿〜〜〜〜〜今
の法子のうた〜〜〜〜〜しは

幸勞せしむと感激あり時
本名依酒も正信清前より作を又
古井大炊乃直使として任者
新しけり平野舟由事しく今日
戸門肥後も及ね平た忠つ續る
罪ありすも入しとて信軍
しりか勝のありしと
大権現奇極よあがしりしと
よりしりしと

正之がいにしりしと

台徳院殿に修しし汝もとのく戦場

のぞむことしともしも
つる人しものさすふ正之又いしと天
満乃歌今ねむど自焼して川
しんと云依後もすてうれ子細いんと
同と記し正之昔日後でしと
しりしと
しりしと
しりしと

利加勢りかせいの事とさすべし二は
小勢せうせいありとみくか何なにくら教しやうと
あおれまはるべし
あつしは接せき廻まわりし事とす
小中せうちゆう流りゆう子し軍兵中津川ぐんべい ちゆうつがわ
と押おわらり香かくわし甲かた
天満てんまんの大河たいがと福ふくく志しを橋はしす
かみは天満てんまんり廻まわりいされ
こまきりしやみくさうこれらびあし

ちろよ敷ふか丸まるとちろよ
事ことあしりといふ

名座院なざえん殿どのきこし百ひやくとくられぬ
志しんよふまきり依よ海かい島しま
大船おほふねもた月つきとすそみ
西にし之の陣じん屋やりり富とみ内うち
名座院なざえん殿どの西にし之のとされ作つくりし

石川いしかわ主殿ぬしどのがりしりあ度た何なに者ものと
天満てんまんの歌うたか丸まると身み焼やき

川ありきくのりーほを先り
汝がふとこ方のごりー汝は夜
しーしを軍陣よりおりしき
まのひくもりありありの奇抄の
りー法威あり正信の色あま
まりといへともまこりりーうの又
の子ありしは十二月の

名徳院破沙本陣と年終りあま
うりさる法勢も月どく志る

けり安友村馬を重信及西之りり
沖旗本陣場と汝はし法軍
勢よりしりつけし又命しり
るりりく先よか契りぬ利常進前
冬儀太直郷井伊掃部直者か後
所よりしり又日しり亦日中て畫ハ
法方れせめ口と見ゆり萩ハ利常直者
及郡原遠にち政直か許しり
畠山ありしりしりりり

名 徳院殿 いうつ又正之とありて
系勝の 鴨野の陣と 堀尾山城の陣
とありて 道とありて
城中より 歩と書屋に
大和川に 淀川
我軍陣と
先本多
出雲守の 堀尾の

とありて 堀尾の陣
城中のありとありて
付の支度とありて
馳来りて 言とありて
汝が垣を 結とありて
とありて 大軍と
とありて 大板和勝の時

台座院殿正之及物比奈源六正重氏
りて是よりさぐりて肥後国

西目付よりけりてさぐりて
この用の用きりて供見すて供其す

大権現殿存一遷許ありて
台座院殿伏見

洛陽二条の城
洛陽一ありて記し洛勢の宿所
洛中の町屋かといひてりて

是より自らを明しゆりて正之是を
其川とてりてち正之正重二条
の城よりさぐりてさぐりて
おられ肥後国仕在の事なうけ
をさぐりて

台座院殿江戸に遷許の後正之正重伏
見より新く肥後国におもひてり
元和元年二月正旬ありてさぐりて
皮地より下巻りて國勢の事と

沙石と圓玉加敷肥ほる忠彦幼少
りしりてありし年の夏大坂
毒丸のしに忠彦が母老が友他守
中多と野女三張しり書状とい
ゆく熊本の城のあまうらんを
与之勇他が友後と内通さる事と
あして正重かあり合せむを
忠彦が湯原梅菴とあつつけく
勇他隠謀ありし熊本とありしむ

与之と熊本境の南開屋城より
つしとこの妻と人質ありし
下川又はあつつけく
勇他も熊本とあつつけく
友人忠彦の母とあつつけく
うつり勇他とも同所より
熊本とあつつけく
あつて矢後とあつつけく
あつつけく

こしどまかくして常事おぼゆるは四
 の人民このうゝをいへるまゝに
 たりれおのゝをそれども種々の大坂
 没落の火も他が徳信ありとて
 ちやくやみぬ
 同二年三月正之重肥後とて
 江戸おとせしむく時
 大指現の石例あり
 右院殿二月二日江戸より 駿府より

酒造の節お湯 ちやくやみぬ
 同の事と言ふこと
 同年六月正之沙よりなりとなり
 て与り同んといふなり
 同七月 越後少右衛門忠輝 自飛あ
 りて越後國及信州河内等と没
 収せしむけし給使として軍務と
 ちやくやみぬ ちやくやみぬ
 中務院の事とてちやくやみぬ

松城の在番ハ小笠原右左衛門
三浦行利飯山氏河丹坂馬込地と
〜越後長尾〜梅尾等
三之回務の事と受けとる
ハ松城を松平伊藤与忠島〜
〜飯山氏は佐久呂備前身〜
〜ハ月江戸〜
同年十月〜江戸神田の地と
あつとさつ〜時之是とす

又日光の宮殿沙遣菅の枝本川
運送の事と受けとる

同二年

台座院致沙入海の時之修葺 今

七月〜御見〜御列
おし〜これと比里見安房守
長門も所領とありあけらるか
左を飛井をあげ地とあり

て明らりり地を争ふ事之みかき
なすけり

同年十二月

台漣院越谷東金 一 以舊將此所

修築と

同日多村と周防も所領没収の事

西之与力歩卒とお具して越後

一 おしき村と一 浦丹後ちり

海と

台漣院越谷東金

同年六月の友肥後志原が家老加友
古馬免下川又友の並河志原及
久我権房等が友英作及子丹後
等と江戸へ来て河江の事

あり八月七日八日執事なりと

酒井雅楽次太世の事

會して所論となりきくと

とと理帳いませと交せらるる同十

台漣院殿及び一 皮おと 沖前

りいごーのいて新史せり
分友堂和泉守井伊掃部内井雅正
本多上野介古井大膳左安友對馬守
よー伺使通表永新同
之禱
台徳院殿先正之と後こりて後等り
所備れ与趣とつとく
か書院
か書ありけり双方黑白とあり
か書

是北いご史せらるる
まゝとつとく
事本正之が肥後中
一との信播と
是年正之
命とけり

江戸城下の通路へ巡見
小乃の事と沙汰と

同五年

名座院殿市入海七月廿一日之 釣

命りしうく暇後日向支回乃境

推察山の一揆巡治の事ありし

は山一山は那須山と号しといふ

くは是の人すれありと路

相良たき兼佐長毎所行球麻那

湖通と初巻長秀名の時来平と山
中の任人如須久を那同紀伊女同
友をち更ししを多ふかの山中あり
翁と執せしむ

大権現の由治世しぬく又沙来京と

を多ふされしりけく山中を事

なりあらこあり如須彈西と

いふ山の山中お特起しし法黨

とありし久右那と

乞^こり^りより山中ねみざれけ^けは^は長^ち毎^ま志^しも^もく^く江^え戸^こへ^へ所^し事^じ上^じ岡^が。
其^まく^く皮^くく^く對^{たい}海^{かい}り^り乃^のふ^ふる^るの^のら
全^{ぜん}臣^{しん}と^とむ^むり^り一^{いつ}陣^{じん}儀^ぎと^と定^{さだ}め^めを
す^すい^い西^{せい}之^之坐^ざ公^{こう}保^ほ口^{くち}即^{すなは}ち^ち東^{とう}門^{もん}の^のら
全^{ぜん}蕃^{ばん}初^しと^と早^{はや}に^に枝^{えだ}出^で二^に人^にと^とは^はり^り
て^ては^は山^{さん}中^{ちゆう}と^とか^から^ら志^しり^り一^{いつ}皮^く地^ちみ
い^いく^くば^ば相^{さう}良^{りやう}と^とも^も馬^ば房^{ぼう}集^{しゆ}の^の依^いの^の巻^{まき}と
月^{つき}一^{いつ}と^と為^な珠^{しゆ}入^いら^らは^はか^か友^{とも}肥^い後^ごの^の松^{しょう}平^{へい}

薩^{さつ}摩^まの^の及^{及び}日^に向^{むか}を^を後^ごの^の人^{にん}數^{すう}と^と集^{あつ}て
山中^{さんちゆう}の^のの^の皮^くと^とみ^みか^かご^ごろ^ろ
せ^せし^しく^く任^{にん}付^つら^ら且^{かつ}正^{せい}之^之は^は先^{せん}と^と捨^{すて}
使^して^て肥^い後^ごり^りゆ^ゆけ^けを^を枝^{えだ}四^しの^の
事^{こと}と^と結^{むす}志^しり^りの^のい^い事^{こと}事^{こと}に^に
は^はら^らと^とせ^せま^まの^の上^{じやう}と^とあり^り時^{とき}み^みの^のけ
糸^{いと}の^の針^{はり}第^{だい}と^と書^かき^きら^らて^てせ^せら^ら
上^{じやう}覽^{らん}あ^あり^りく^くま^ま身^み之^之を^を糸^{いと}の^のま^ま
て^て古^こ井^い人^{にん}炊^い功^{こう}利^り勝^{しょう}。 任^{にん}け^けの^のは

頃評議一々事 乞より一々
ともし正之か云雨 屯理わつるは
あれは汝が先悟り 申うせよ
にお針一々一々 さま志うさひ
少佐すづきとあり
日月那之為 依んて新く古
孝悌の爲 務り 若るは風
るよ志のき 陰難りと云々
お身長毎々 我成人者か

家あみ病海より 推察山(書)を
ていし我等 上使しして地
のぞみ山中の 竹記よ 醫果及
田畠等の事 少佐す人々の
作かさるるあり あれよ
陰能ありて 人馬海一々
はくはくし 事ありて
の位人者十五 二六下
とす人者(書)あり

ところの山中の凶徒うの罪
伏せん事と察して人右(素)
割要害の地と申す一てしせきころ
あのあもせざんとさむり
よきて西之書と端て
よきと遠者ら何あうやそ
くく悪逆とたくむ法中人れあ
ううのものかうはしう
湯湯すへーといひとれし一撥芽

あつりく洋儀してもいふ
一も山中の者ともかき湯せら
魚と文とたあはれそね須弾正
が子芽とけりうう三十條人
山中とわく八月十日人右(素)
ト一いさ西之書ひうう人
同道はけりうう一うう
かう一をき枝芽の油湯とわき
徒とたもりうう新記のひ

ときく屋さうしういけうの
口とさげしうづひくみか
めり山中村里の家の人
守名子おしう約きま
後内中下をふふと一撥の
と成りしうけとけうの
新しうみ一撥の十九人と
さく廿三日相良城下とちて
き内代しうしう村中北
徳黨

三十餘人に代みあるみか
一町ととくとけう 津米下と
しうあしと一撥のあか
ととととととととととと
山流と津と山とみか
あしととととととととと
里とととととととととと
一とととととととととと
若古ととととととととと

之乃りりしとてあつては一は
函流と他亦あしつてあやうれてさ
て二ははま津とら申とあつては
あつてはとら津とら申とあつては
あつてはとら津とら申とあつては
うもふとら津とら申とあつては
の中あもをらういれらうとら津とら申とあつては
九折らうあつてはとら津とら申とあつては
口とあつてはとら津とら申とあつては

あつてはとら津とら申とあつては
うもふとら津とら申とあつては
の中あもをらういれらうとら津とら申とあつては
九折らうあつてはとら津とら申とあつては
口とあつてはとら津とら申とあつては
あつてはとら津とら申とあつては
うもふとら津とら申とあつては
の中あもをらういれらうとら津とら申とあつては
九折らうあつてはとら津とら申とあつては
口とあつてはとら津とら申とあつては

かく鳥の細橋より九月二万母
か船して休んしり海すすく

のしり

名陸院殿江戸よ墨沙の休むこと

同六年江戸三九虎口石垣津重徳の
と記す之なりと

同年より翌年よりつろすすく
任よりけき海よりく正之伊豆相摸
後よりりて役の志ともいふ大石の

江戸よんことしり

同六年江戸市城殿守土臺の石垣
よしりけきの石垣津重徳のなりと
りけき海より

同九年越前冬儀忠直御罷り
配海せしり

同年 出八海の中記す之 釣余とせ
くありしり 東部より越あか

おししと回勢の事とせしめり
聖子の八月江戸より

寛永二年正月二日 与りて

江戸城下宅地とありて法寺と

ありて

同年 江戸より西へお別小田原と

いりて聖年二つにわたりて 吉原城と

枝地とありて江戸より西へありて

ありて江戸より西へありて

同三年 西へ江戸より

同三年 東へ江戸より 江戸参府の時と

ありて

同三年 日光 江戸参府の時と

同年十一月より 聖子の林より

江戸参府の時とありて西へ

ありて

同八年の事

在徳院殿西之よりありて江戸参府

来七月より下総国小金の野山を
降りて、下総常陸下野奥列
の舟泊とそく通一運漕となあ
わしめんとの事なりし、
おしぬ

同年

台座院殿西之とありての船りく相列
座倉りし、湯泊ありし、世先り
て湯の温冷とそくしとあり

去年四月西之座倉りし、
ゆきと事とそくしとありし、
遠倒漸よりとありし、
のゆきとありし、

台座院殿西之湯の対毎度西之り
ゆきと事今切尾列、
并し人馬の事と沙汰せしめ
ゆきと事ありし、
あけら事これあり

同十年

將軍ありり 領地不百名とくらへ給ふ

同十一年

將軍ありり 入海の修成と

同年九月日光と結糸の河庵従と

同十七日日光と結糸の修成と

將軍ありり 古柳自古の河之由り矢

并々春葉と進と

同十八年八月

竹子代君と進生同り

將軍ありりの約命より世平と

道の猶矢と射暮目陰陽の清矢

と進と

同十年十月 何とけと

り矢の招本取実の書と撰と

これと缺と

同廿年 竹と進後の村と赴地

の留害と巡り 何と書極と

政述

長門守

元和五年

名徳院殿

將軍 寛平三年

寛平三年

名徳院殿 治之 治の時 又西之と申す

治之

同八年

名徳院殿 日光 治之 治の時 又西之と申す

又西之と申す 又使わすて他國

又使わすて他國 治つけらる

治は政述互力 同八年 又西之と申す

かきりて治番とつとむ

同十一年

將軍 治之 治の時 治之

同八年 九月 同十七年 同月

將軍の日光寺系譜の時父正之也
同く修業

三朝

主馬 宮内少輔

本氏よりなる〜大久保と号す

元和の〜

台座院殿

將軍の御

寛永二年十二月より時〜美中に

修業

同五年十一月由小姓組の番とつむ

同七年四月中奥の由小姓とある

同八月朝の秩産は同乙卯月九

力間〜

同九月由小姓と門とむ

同八年四月由膳と給仕番とある也

つけ〜

同二月川越河野將の^り記修^り也

同九年四月日光^り系^り諸^りの時修^り也

同十年三月宅地^りと^り也

同年八月^りと^り也

お教^り度^り也

同十一年^りと^り也

同九月日光^り系^り諸^り修^り也

同十月^り也

同十二年十二月^り也

同十二年四月日光^り系^り諸^り修^り也
同年六月^り也
同十五年四月^り也
同十七年^り也
同十九年四月日光^り系^り諸^り修^り也

正義

史部

寛永十二年八月十五日

將軍あつたあつた 湯見あつたあつた

同年十一月廿五日 水小性 紐の番

あつたあつた

同十三年十月廿五日 中興あつたあつた

水番あつたあつた

同十五年十二月朔日 水切未あつたあつた

あつたあつた

用信あつた

同十六年十二月廿五日 水あつたあつた
紐あつたあつた 紐つけらる

古あつたあつた

をあつたあつた 水あつたあつた 子あつたあつた

正重あつた

権八郎

寛永十八年六月朔

將軍忠子一福見一

日十九年六月廿一日

とつとむ

女子

久貝右左衛門尉三長の妻め

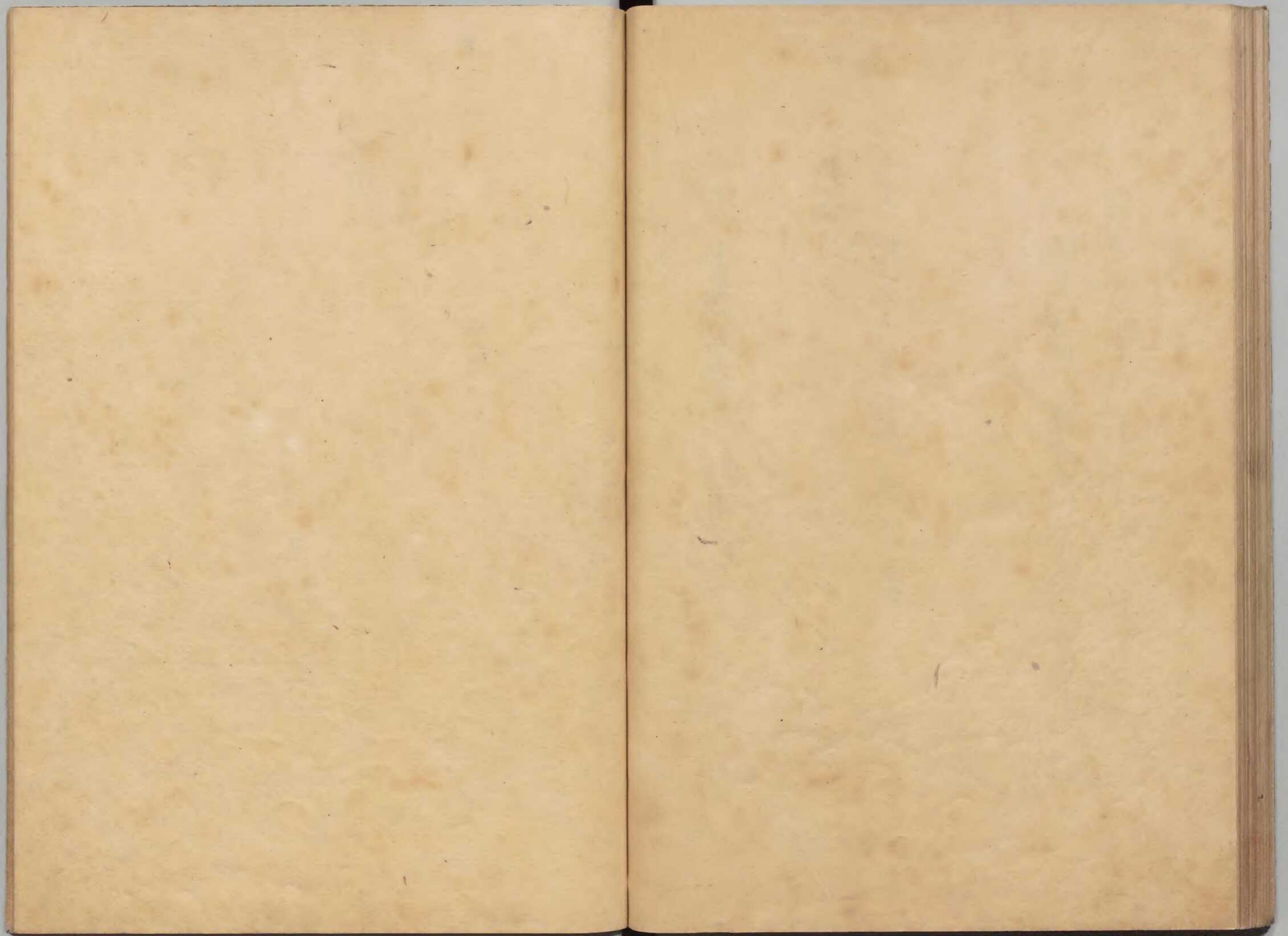
女子

左衛門右衛門尉用少の妻め

女子

根来左衛門尉盛次の妻め

家乃紋 丸の内の新の好一本の



直次

阿倍

竹中平十郎 生國三河

大久保相模守右隣

長五郎右隣

三郎右隣

元和三年四月廿六日

五十二歳 法名淨心

重次

阿倍基忠左衛門尉

生四氏孫

阿倍守部兼兼尉重高之姪あり又

死幼み及々重次として重高より

傳せしあり阿倍氏と云く

寛永三年四月重高が奏志より

~~~~~

將軍家一重高

寛永十八年十一月廿六日

小拾人重高の重高と云く

家乃紋 丸の内鷹羽一本

